

小学校（入門期）英語活動の What? と How?

～ 聞くことの指導 ① ～

著 者： 小野村 哲
（おのむら さとし：NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所代表）

発行日： 2009年7月 第1版発行
発行者： NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所
〒305-0051 茨城県つくば市二の宮4-8-3 1-404
TEL & FAX : 029-856-8143
E-mail : rise@cure.ocn.ne.jp
ホームページ : <http://www.rise.gr.jp/>



NPO法人リヴォルヴ学校教育研究所は、おもに不登校児童生徒や学習につまずきがちな子ども達の支援に取り組んでいます。

小学校（入門期）英語活動の What? と How?



～ 聞くことの指導 ① ～



- この冊子は、非営利目的に限り自由に利用できます。ただし、そのままプリントアウト、コピーをする場合に限られます。部分利用、翻訳等は含まれません。
- 利用の際は必ず下記サイトをご確認下さい。
www.bunka.go.jp/jiyuriyo
- イラストには、マイクロソフト社が提供するクリップアート<http://office.microsoft.com/ja-jp/clipart/>を一部加工して、利用しています。

特定非営利活動法人リヴォルヴ学校教育研究所

小野村 哲

What ? 主体的に聞き取る力

入門期に身につけさせたい技能として最初にあげられるのは、やはり「聞いて理解する力」でしょうか。小学校英語活動において「英語の音声に慣れ親しませる」ことを目標としてあげているのも、「聞いて理解する力」の素地を養うことを念頭に置いたものでしょう。

そこで本稿ではまず初めに、「聞いて理解する」ということの中身について、考えてみたいと思います。

聞いて理解するという行為は、ただ耳に入ってきた音を理解するといった受け身の活動ではないことが明らかにされています。たとえば今、あなたはにぎやかなパーティー会場にいるとします。そしてその会場の片すみで誰かがあなたの名前を言ったとします。「誰かが自分のうわさ話をしている」と思った瞬間、それまで耳に入ってこなかったその会話が、急に気になりだした。そのような経験はきっと誰にでもあるはずです。

私たちは毎日の生活の中でも、自分に必要な情報とそうでない情報を選択的に聞き取っています。これだけでも、聞き取るということが受け身の活動ではないことがわかります。

古い文献からの引用になりますが、パーマーが次のように述べているのも注目に値します。

“Speech is no more than a series of rough hints
which the hearer must interpret.” (Palmer, L.R. 1936)



○ カクテル・パーティー効果

たくさんの方が雑談している、カクテルパーティー会場のような中でも、興味のある人の会話や自分の名前などは、自然と聞き取ることができます。1953年、心理学者のチェリーによって提唱されました。(ウィキペディアフリー百科事典より、一部改)

まとめ

本稿では、聞くことの指導に関して

- 「聞いて理解する」ということは、単純に耳から入ってきた音を理解するような受け身の活動ではないこと
- ただ聞かせるだけでは、聞いて理解できるようにはならないし、英語の音声に慣れ親しむこともできないこと
- 2つの認知処理様式のバランスをとることが重要であり、耳以外の情報を使って総合的に理解する習慣を身につける必要があること
- そのためには、読み上げられた音と、語のつづりがある程度照合できるようにしておくこと
- 小学校においては音韻の気づきをもたらすことが重要であること

などについてふれました。

しかし、まとまった英文を聞いて理解することについては、ふれることができませんでした。聞くことについてお話をしたときによく質問されることに、「英語にカタカナをふるのは是か非か」という問題もあります。

うるさいことを言い過ぎなければ、子どもたちは発音練習が大好きです。次号では単音の練習のポイントについても、もう少し詳しくお話したいと思います。さらには、聞くことにおいても話すことにおいても、単音以上に重要な、英語のリズムに慣れ親しむという課題についても言及したいと思います。

ご意見・ご感想をお寄せください

本稿は、私どもの実践と研究の成果をまとめたものです。皆様のご協力のもとに改善を重ね、一人でも多くの先生方の参考に供することができればと考えております。

皆様のご意見、ご感想をリヴォルヴ学校教育研究所までお送りいただければ幸いです。

もちろんこれは1つの例であって、場面によってはいきなり単語を見せて「単語と絵を線で結んでみよう」という練習も行います。

このときに気をつけなければいけないのは、単語を先に見せて複数の絵の中からその単語にふさわしい絵を選ぶ練習と、逆に絵を先に見せて、

T: What's this? (これは何ですか)

Ss: Answer the question. (質問に答える)

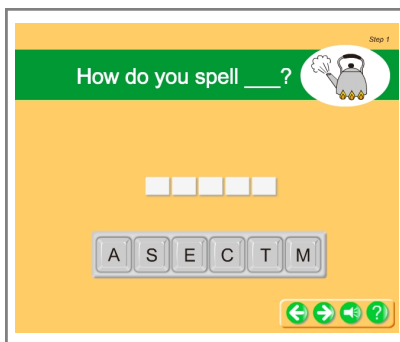
T: Right. This is a duck. (そう、ダックです)

Choose the appropriate word to the picture.

(絵にふさわしい単語を選びましょう)

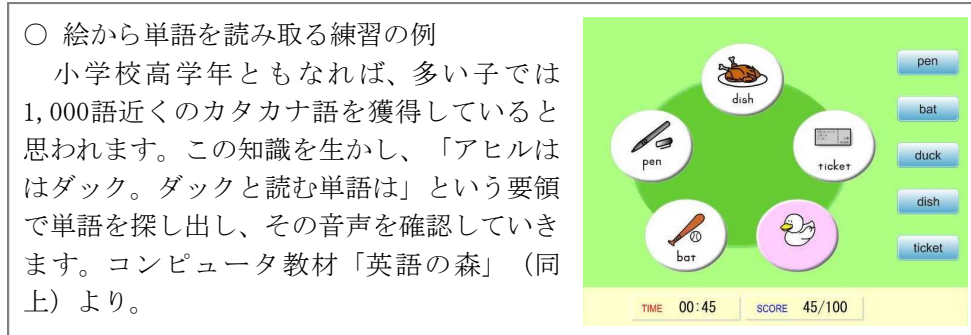
とする練習とを並行させることです。前者は継次的、後者は同時的な処理能力を高めることをねらっています。後者の練習では penguin のような難易度の高い語にもあえて挑戦させます。

バランスが重要であることは繰り返し述べさせていただきました。絵から推測して単語を読む練習は、単に音の足し算やフォニックスのマイナス面を補うばかりでなく、将来、まとまった英文を聞いたり読んだりして理解する際の学習ストラテジーを養う練習ともなります。



○ 音の足し算の練習例

つづりと音との関係性に気づき、つづりと音とをあらかじめ照合できるようにします。meat / team / steam / stream など共通性を持つ語を続けて練習することで、負担も少なく楽しみながら練習できます。コンピュータ教材「英語の森」(リヴォルヴ学校教育研究所)より。



○ 絵から単語を読み取る練習の例

小学校高学年ともなれば、多い子では1,000語近くのカタカナ語を獲得していると思われます。この知識を生かし、「アヒルはダック。ダックと読む単語は」という要領で単語を探し出し、その音声を確認していきます。コンピュータ教材「英語の森」(同上)より。

要するに、会話を理解するうえにおいて、耳から入ってくる情報などはおおざっぱなヒントに過ぎないというのです。

パーマーの言の正しさは、マガークとマクドナルド (McGurk & MacDonald 1976)が行った実験によっても明らかです。たとえば、「バ」という音声に「ガ」と言っている映像を組み合わせると、私たちはそれを「ガ」と聞き取ったり、またときに「ダ」と理解したりします。これをマガーク効果といいます。紙上では再現できないのが残念ですが、インターネットで検索されると、これを体験できるかと思えます。

つまり、耳から入る音情報などはきわめて不正確なものであることを知っている私たちは、たとえば相手の口の動きや場面、文脈などのさまざまな情報を主体的に統合し、内容を理解しているのです。

1 外国語学習の勘違い：耳で聞くから聞き取れない

もう少し、「聞くこと」について考えてみましょう。

リスニングの力を磨くことを、「耳を鍛える」と言ったりします。しかしどんなに耳を鍛えてみたところで、それだけでは外国語を聞き取れるようにはなりません。1つには、耳という感覚器官がそれほど精密には作られていないということがあるかもしれません。しかしそれ以前に、耳に届く音情報のいい加減さという問題もあります。

今、私の手もとに76名のネイティブ・スピーカーに母音の発音をしてもらったときの、音のばらつきを示す図があります。これを見ると、hat / hut / hot などの語のそれぞれの母音の境界はあいまいで、重複さえしています。いかに耳を研ぎ澄ませたところで、それだけでは実際のコミュニケーション場面で耳にするこれらの語を聞き分けることが困難であることがわかります。

竹蓋(1984)は、「口の大きさも形も違い、その動かし方も機械で測るわけではなく、またのどぼとけの形状も十人十色の人間が発音しているのだから、このように違うのがあたり前」とした上で、「母国語の音声として聞いている限り、…中略…バラツキのあることにすら気づかない。しかし、それが外国語の音声として与えられるときと、まったく異なる、バラツキに惑わされた聞き方をする」と指摘しています。

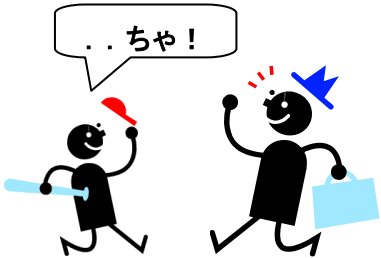
では、どうしたら英語が聞き取れるようになるでしょう。そのような質

問をされると、私は決まって「耳だけで聞こうとするから、だめなんです」と答えます。するとまた決まって、「それじゃ、どこで聞くんですか」という質問が返ってきます。そこで私は耳を使わないリスニング・テストをやっていただきます。

「小学生同士のあなたと私がけんかをしたとします。負けて泣かされた私が何と言うか聞き取ってください」と言ってから、声には出さずに「バツ」と口を動かします。すると誰もが、「馬鹿って言いました」と答えます。「口がそう動いていたから」と言う人もいますが、口を隠しても結果はだいたい同じです。誰もが皆、耳ではなくその場の雰囲気ですべて聞き取っているのです。

事実、私たちはふだんの生活の中で、耳を使わないリスニングを頻繁に行っています。例えば駅のホームで、恋人を見送るあなた。電車の窓ガラス越しに、恋人が「〇〇〇〇」と唇を動かす。それが悲しい別れの場面であれば、たとえ声は聞こえなかったにしても、あなたはそれを「さよなら」と聞き取ることができます。反対に声ははっきりと聞こえたとしても、誰かに突然「チャ」とだけ言われたあなたはその意味を理解することはできません。しかし帽子を取って頭を下げていれば「こんにちは」だし、湯飲み茶碗を突き出していれば「茶（をくれ）」と言っているのだとわかります。

英語では I got it. が「アガリ」のように発音されるから、聞き取りが難しいという人もいます。しかし私たち日本人だって「こんにちは」を「チワ」とか「チャ」などといい加減に発音していることが多いのです。それでも相手の言っていることが理解できるのは、そこに文脈や場面があるからです。



○ 音声のあいまい化
 なるべく楽をしようとする人間の性向は、発音にも現れます。私の身のまわりの人が言うのを聞いていると、「こんにちは」が「……わあ」としか聞こえない人もいます。外国語の学習でも、耳だけに頼らず、総合的に判断して聞き取る習慣を身につける練習が必要です。

ワードは、音韻的気づきです。英語を母語として学ぶ子どもたちは、たとえば Mother Goose の Hickory, dickory, dock, The mouse ran up the clock などの歌を通じて、hickory の h を d に入れ替えれば dickory という別の単語ができるということをおさいうちから自然と身につけていきます。

小学校においては、難しいルールを教え込むことを目的とするのではなく、音の足し算や引き算を通じて、どのようにして英語の単語ができあがっているのかを気づかせることに時間を割くべきです。

具体的指導事項としては、まず、「アルファベットには、名前とは別にそれぞれの音（読み方）がある」ことに気づかせることがあげられます。私はいつも下記の要領で動物の名称と鳴き声を問う活動から始め、次に文字について練習します。

T: What's the name of this letter? (この文字の名前は何ですか)

Ss: Answer the question. (質問に答える)

T: Right. This is 'p.' (そう、ピーです。)

What sound does the letter 'p' make? (ピーの音はどんな音)

Ss: ……

T: P says /p/, /p/, panda. (ピーはプ、プ、パンダです)

Let's sing. (さあ、歌ってみましょう)

次の段階では、pet / jet / net / ten / tent などカタカナ語としてもなじみのある語を中心に練習します。その概略を示すと以下ようになります。

- ① 絵と単語を同時に示しながら、単語の発音練習
- ② カルタ遊びの要領で、読み上げられた単語カードを取る練習
- ③ 文字を並べ替え、単語を完成させる練習（音の足し算：次項参照）



○ 文字音練習の導入教材
 まずは動物の名称を問い、次に英語での鳴き声を選択させます。ここで name と sound を強調した上で、「それではこの文字は」と進めれば、日本語を一切交えずとも、ゲーム感覚で文字音の導入ができます。コンピュータ教材「ワラビー・スクール・プログラム」(ジャスティー)より。

63%に過ぎず、「礼儀正しい母音のルール」については、2つの母音が並ぶ単語全般での比率は48% (Clymer, T.1963) に過ぎません。これを見れば、フォニックスを教えることに否定的になってしまうのも当然です。

しかし近年の研究では、h と at を足せば hat になるなどの音韻的気づきが英語のような語を学ぶ際に非常に重要な役割を果たすことが明らかにされています。(この点については、「プルーストとイカ」メアリアン・ウルフを参照されたい。) フォニックスが日本の子どもたちにとっても非常に有効な指導方法であることに間違いはありません。

ここでもやはり、ポイントとなるのはバランスなのです。学習指導要領解説に、文字指導は「外国語の音声に慣れ親しんだ段階で開始するように配慮する必要がある」と記されているのも、これまで述べたようなことを考慮しているものと推測します。同時に、「読むこと及び書くことについては、……中略……聞くこと及び話すこととの関連をもたせた指導をする必要がある」とされていることから、フォニックスを頭から否定しているのではないことがわかります。

○ サイレントe のルール

fine のように母音字+子音字+ e と並んだ場合、前の母音は名前読みとなり、e は発音されない。

fin - fine hat - hate cut - cute など

○ 礼儀正しい母音のルール

母音字が2つ並んだ場合、初めの母音は名前読みとなり、後ろの母音は発音されない。

ee - see ea - eat ai - rain など

2 ポイントは バランス

私たちが日常生活の中で無意識に行っている言語活動は、個人差こそあれ実によくバランスがとれたものです。しかし外国語を教室で学ぶとなると、教える側も教わる側も私たちが長い進化の中で身につけてきたこのバランス感覚を失いがちであるように思えます。

バランスをとろうと意識している間は自転車に乗ることはできませんが、それを無意識に行えるようになれば、たいていの人が自転車に乗れるようになります。おそらく教室にいるときの私たちは、肩に力が入ってかえってバランスを崩しているような状態にあるのでしょう。

人が何ごとかを理解し知識として獲得する過程には、情報を1つずつ積み上げるように順序立てて処理する様式「継次処理様式」と、複数の情報を関連性に着目して全体的に処理する様式「同時処理様式」があります。

「こんにちは」を聞いて理解できるのは、「こ・ん・に・ち・は」という音を順序正しく聞き取りながら理解する継次処理とともに、場面から推論を働かせながら、全体を総合的に理解する同時処理とがバランスよく行われているからです。

同様に「おなかがすいたからだ」のような文を読むときにも、文字を順番に音にして単語を組み立て、文意を理解するのは継次的な処理様式に当たります。しかしそれだけでは、「お腹が空いたからだ」を「お腹がすいた体」や「お腹がすい宝だ」などと読み間違えかねません。逆に「一生懸命に働いたら、お腹が…いた」のように肝心な部分を空欄（または聞こえない）にしても、私たちは文を理解することができます。これは文脈から内容を推測して読んでいるからで、同時的な処理様式によるものです。

次項の図1は、「長所活用型指導で子どもが変わる Part1 / 2」（図書文化）から借用させていただきました。同書には、継次処理と同時処理について簡潔にまとめられています。英語活動に限らず、授業改善を試みる際にとても役に立つ概念ですから、ぜひ参照いただきたいと思います。

ここまでは「聞いて理解する」ということの中身について、考えてきました。パーマーや竹蓋の指摘は、聞くことの指導について考える際の重要

4 音の足し算、引き算

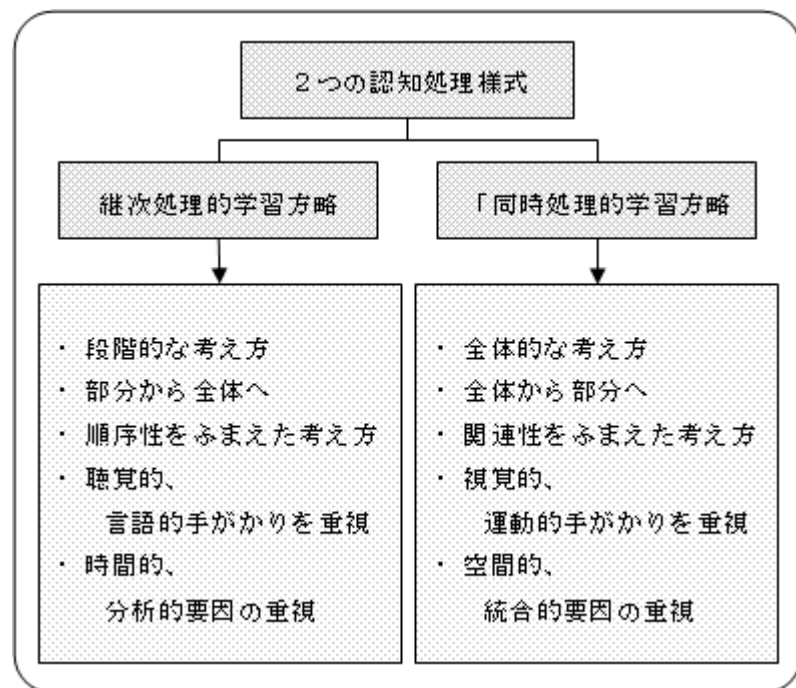
私がここで申し上げたいのは、入門期の段階で milk や panda 、 wheel や tooth paste などの語を正確につづれるようにしようということではありません。アルファベットは形が単純なだけに、b と d など形の似た文字を混同し、ここで大きくつまずく子も少なくありません。これらの語を正しくつづれるようになることを全員の到達目標とするのは、中学2年生としてもよいのではないかとさえ思います。

その代わりに、小学校ではフォニックスの前段階（もしくは導入部分）の練習をじっくりと時間をかけて行うべきだと考えます。ここでのキー

なポイント提示しています。端的に言えば、聞くことに限らず「コミュニケーション能力の素地」を養うとは、継次的処理と同時的処理とをバランスよく使えるようにすることだと言ってもよいと、私は考えています。

以上に基づき次からは、英語の音声に慣れ親しませ、聞き取る力を養うための指導のあり方について考えてみたいと思います。

図1



「長所活用型指導で子どもが変わる Part1 / 2」 (図書文化) より

○ 紙面の都合で以下に、本稿執筆にあたってのおもな参考文献を列举します。

- 「ヒアリングの行動科学」 竹蓋幸生 研究社出版
- 「長所活用型指導で子どもが変わる Part1 / 2」 熊谷恵子他 図書文化
- 「フォニックス指導の実際」 A・W・ハイルマン 玉川大学出版部
- 「ブルーストとイカ」ー読書は脳をどのように変えるのか?ー
メアリアン・ウルフ インターシフト

かされます。彼らが Thank you. とは言えても thank を「読めない」「書けない」「意味を知らない」というのはなぜでしょうか。

そこで私が提案するのは、小学校においては「音の足し算、引き算」の練習に十分な時間を割くということです。耳慣れない言葉を使いましたが、要するにフォニックス（読みとつづり字の規則性について教える指導方法）のことかと察してくださった方も多いのではないかと思います。しかしフォニックスについては、小学校学習指導要領解説外国語活動編の中に、「発音と綴りとの関係については、中学校学習指導要領により中学校段階で扱うものとされており、小学校段階では取り扱うこととはしていない」と明記されています。

それにはそれだけの理由があります。まず第一に、規則を教え込むという指導法が子どもたちの負担過重となりやすいことです。

これを擁護する意見として、米国などではフォニックス指導で大きな成果をあげているというものがあります。たしかにそのとおりです。しかし第一言語として英語を学ぶ場合と、外国語として英語を学ぶ場合とでは条件が異なることも考えなければなりません。第一言語、または第二言語として英語を学ぶ場合は、子どもたちはフォニックスを学ぶ以前に多くの語を獲得しています。しかし日本の子どもたちはそうではありません。

フォニックスを用いて読むということは、典型的な継次処理になります。英語圏の子どもたちは、日常生活の中で同時に読むということを繰り返した上でフォニックスを学ぶことで、バランスを保っていると推測されます。しかしこれを日本の子どもたちに行った場合、そのバランスの悪さを強調してしまうこととなり、penguin のような語の読みにてこずるようなことに陥りがちです。フォニックスなど知らなければ、あっさり「ペンギン?」と言ったであろう子が、そのすぐ横にペンギンの絵が示されているにもかかわらず、「pen (ペン) ・ gu (ガ) ・ in (イン)。ペンガインって何のこと?」と首をひねってしまうのです。

そこで「gu のあとにさらに母音字が続く場合、u が発音されなかったり……」などとルールを付け加えていくと、これはもう完全に負担過重となってしまいます。

フォニックスのルールには例外が多いというのも問題です。代表的なルールの1つとしてあげられる「サイレントe」にしてもその適用率は

は、実物やイラストを示しながら聞かせるようにすることです。In Japanese, we say ‘ミルク.’ In English …… と言いながら、日本語と対比させながら聞かせるのも有効です。

wheel「ホイール」のような語はどうでしょう。milk との違いは、カタカナ語として使用されてはいるもの子どもたちにとってあまりなじみがないこと、そして「ホイール」という音が日本人にとってつかみどころがなくカタカナ語の「ホイール」とも距離がある音だということです。母国語話者が wheel と発音するのを聞いて、これをすぐに「ホイール」と結び付けられる児童生徒は少ないことでしょう。そこでこのような場合も、In Japanese …… と対比しながら聞かせるようにします。

そしてさらに、単語カードを指し示しながら、wh (ホイ) + ee (イー) + l (ウ) と音を分解し発音してみせます。

tooth paste のような語では、単語カードの必要性が一層高まります。すでに述べたように、文字を見せずに聞かせるだけだとすると、多くの子どもたちは「トゥース・ペイスト」を「トゥー・スペース」のように聞き取ってしまうことでしょう。

入門期においても重要なのは、音と同時に絵カードや単語カードを示すなどして目からの情報も活用できるようにすることです。

3 耳以外を使って聞き取る力を養うために

しかしここで疑問がわいてきます。音声中心だからといって読むことの指導をまったく受けていない児童に tooth paste や wheel のような語を見せても、意味があるでしょうか。多くの子どもたちは単語カードになどは目もくれず、聞こえたままに「トゥー・スペース」「ウィー、ウィー」と繰り返すに違いありません。milk や panda のような語でも、ローマ字知識さえ身につけていないとしたならば、単語カードの利用はほとんど意味をなさないはずで、これでは思うような学習成果を望むことはできません。つかみどころのない情報は、記憶にも残りにくいものです。

「そんな難しい単語は入門期には指導しない」という方もいらっしゃいましたが、これらはあくまでも例に過ぎません。中学2、3年生になっても thank が読めなかったり、意味がわからない子が少なくないことには驚

How? 英語の音声に慣れ親しませる

みなさんは、「がっこう」の「が」と、「しょうがっこう」と言うときの「が」では発音が違うことを認識されていたでしょうか。子どもたちの中にはこの2つの「が」を同じように発音している子もいますが、それを聞いて、「その発音は間違っている」と指摘されていた方はどれほどいらっしゃるでしょうか。

英語の発音について、私たち日本人は神経質に過ぎるように思います。たとえば日本人が苦手としがちなLとRの発音の区別なども、さほど優先度が高い問題であるとは思えません。耳を通して得られる情報は、発音がいいかげんだったりまわりの物音にかき消されたりといったぐあいでは精度が低い。自然と私たちは耳にだけ頼ることをやめて、場面や文脈などのさまざまな情報を総合して聞く習慣を身につけています。

少し乱暴な言い方ですが、rice (ご飯) なのか lice (シラミ) なのかなど、そんなところまでは忙しいレストランの店員もホームステイ先のホスト・マザーもまず聞いてはいないということです。したがって rice と lice を聞き分ける力、発音し分ける力は、少なくとも入門期においては、さほど優先度が高い問題ではないということになります。

「初めから正しい発音で……」という人もいますが、人によって発音にバラツキがあることもすでにお話ししました。ましてや世界各地で使われる英語には、個人差以上のばらつきがあります。「正しい発音」という人は、そのどれを指して正しいと知っているか疑問です。日本語だって、あなたが発音する「う」と、私が発音する「う」とでは異なっているかもしれません。

「英語の音声に慣れ親しませる」とはいつても、それはLとRの区別ができるようになるということではないはずで、これをどうでもいいとまで言うつもりはありません。入門期においても指導はされるべきでしょう。しかしここにこだわりすぎていたら、子どもたちは発言の意欲を失っ

てしまいます。

ポイントはバランスです。英語の音声に慣れ親しませようとする際にも、LとRなどの一音一音に着目させることと、単語や文の中での音に慣れ親しませることとのバランスをとる必要があります。正確さと同時に、失敗を恐れずに進んでコミュニケーションを図ろうとする態度を養うことも大切です。

では入門期（小学校）においては、英語の音声に慣れ親しませ、聞いて理解する力を養うためにどのような指導を行ったら効果的なのでしょう。

1 単音の指導

映像によるちょっとした妨害を受けただけで、私たちは「バス」を「ガス」と聞いたり、「落馬（ラクバ）」を「ラクダ」と間違ったりします。母語でもこんな調子ですから、fit / pit や three / free などの識別には困難を示す子が少なくありません。tooth paste は、「トゥー・スペース」のように認識されてしまいがちですし、wheel などの語は何度聞かせても「何と言っているのかわからない」という子が大勢出てくることでしょう。

母語として英語を習得する場合は別ですが、日本人の子どもたちが外国語として英語を学ぶ場合、ただ聞かせるだけではこの問題は解決できません。こう言い切ると、「いや、私はできた」という人が必ず出てきますが、それはその人が置かれた言語環境やその他の要因によるものでしょう。私がここで対象としているのは、一般的な日本の子どもたちです。

近年の言語学や脳科学が明らかにしつつあるところから考えると、人は生まれながらに、言語を聞いたり話したりするのに必要な音のパレットのようなものを備えているのではないかと思います。おそらく幼い子どものパレットは画家たちが使うような間仕切りのない一枚の板のようなもので、たくさんの音声を聞くうちに少しずつこの辺りが赤色、そしてピンクやオレンジ色、白や黄色と絵の具が山をなしていく。しかし間仕切りがない状態というのは、不都合も抱えています。そこで子どもたちは喃語という発声練習を経て、赤はこんな色、ピンクはこんな色という要領でパレットに枠を作っていくのと同様に、「ば」はこんな音、「だ」はこんな音というようなプロトタイプ（基本形）を作っていくと思われま

しかし一度しっかりとした枠ができてしまうと、その規格に合わない音は整理しにくくなり、そのために習得が難しくなります。後からやって来た英語の音という絵の具はそこにのりづらくなってしまふのです。青か黄色かという枠組みしか持たない人に緑色を見せたときに、それが青と識別されてしまうのと同じように、thank は sank と識別されてしまいます。

そこで入門期の子どもたちに three のような語の発音指導をするときには、日本語との口形の違いをはっきりと意識付けしながら練習させるようにします。ただし、このような練習に片寄り、子どもたちを負担過重の状態に追い込まないようにすることが大切です。入門期には、thank が sank であったとしても、個人差にも配慮しながら長い目でゆっくりと指導を重ねることです。

2 単語レベルでの聞き取り

実用的な英語力を養うための素地づくりを目指すのなら、より重要となるのは、単語や文の中での音の聞き取り、識別能力を高めることです。

しかし、I got it. は「アガリ」、milk は「メウク」のように発音されるわけですから、Lの文字音をいくら練習したところで、それだけではなかなか上達は望めません。「このようなLの音は、暗いLと呼ばれて、日本語のウのように聞こえる」と教えるのも1つの方法ではあるかもしれませんが、入門期の児童生徒には負担となることが危惧されます。

ではどうしたら、単語レベルでの聴解力を高めることができるでしょう。ポイントは「耳だけに頼って聞き取ろうとするような悪い癖をつけない」ようにすることです。

実生活では場面や文脈が重要な要素になりますが、入門期の外国語の授業では、これに頼ることは難しいことも予想されます。だとしたら milk

